サタンが紅茶ポットと二つのカップをもって伊吹の部屋に戻ると、伊吹は食べ終わったエクレアの皿を前にテーブルの上にうつぶせになっていた。
ポットとカップをテーブルに置くとサタンは伊吹を軽くつついた。
びく！っと伊吹は体を震わせると大きく肩で深呼吸をした。
「どうしたんだ伊吹？」
サタンの言葉に伊吹が顔を横に向けるとわずかに頬が赤くなっている。
サタンが額に手を当てるとわずかに熱が。
「サタン・・・私なんとなくムズムズする」
サタンは伊吹の様子を見ると落ち着いた様子でカップに紅茶を注ぎ一口飲んだ。
「悪い。人間用の媚薬を手に入れたからさっきのエクレアに入れた」
「は？媚薬」
「ああ。俺が伊吹と付き合っているのを知っているある悪魔が渡してくれたんだ。
悪魔には効果がなくて人間には絶大だと聞いていたが・・・本当みたいだな」

「サタン・・・なんでそんなものを使ったの？」
「たまにはいいなと思ってな」
「もしかしてエクレアもこのために・・・？」
「それは違う。媚薬を受け取ったらたまたまエクレアが目の前にあったんだ」
さらっと言い放ったサタンに伊吹はどうリアクションを取ったらいいのかよく分からなくなっていた。
サタンは再び伊吹を軽くつつくと伊吹の体はびく！っと震えた。
「これは凄いな。感度が上がるとは聞いていたがこういうことだったのか」
「うー！」
「なんだ伊吹？恨めしそうな顔をしているじゃないか」
「同意は・・・していない・・・」
サタンは伊吹を抱きかかえるとそのままベッドに横たえた。
「伊吹は正直に話しても媚薬なんて使わせてはくれないだろう？」
「うー」

「なんだ？ひどいって言いたいのか？」